
Liebesgeschichte (リーベス・ゲシヒテ) ~ 恋物語 ~

杜神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リーベス・ゲシヒテ
Liebesgeschichte 恋物語

【Nコード】

N3607I

【作者名】

杜神

【あらすじ】

恋物語の短編集です。

ちよっぴり切ないもの。

ハッピーエンドなもの。

色々あると思います。

ゆっくり、恋の味をお楽しみください。

(徐々に書き足して参ります。)

第一章 Lehrer (レラー) (先生) (前書き)

学校でふとある出来事。

其れは一人の少女の恋物語。

紡ぐ答えは何を指し示すのか…

第一章 Lehrer(レラー) (先生)

小説 Liebesgeschichte(リーベス・ゲシヒテ) 恋物語)

第一章 Leherer(先生)

授業終了のチャイムが鳴る。

「よし、今日は此処までにしよう。」

先生がそう言う。それに答える様に宿直の係が号令を掛ける。それに合わせて生徒全員が先生に礼をする。そう、学校の教室でよくある光景だ。

先生は教材を片付けて手に持った後、教室を出ようとしてあたしの前で立ち止まった。そして言う。

「どうした。結城。最近余り元気が無いように見えるが?」

そう語りかけてきた。あたしは、出来るだけ普段通りにしようと思っ
掛けながら答えて言う。

「あ…いえ、元気はあります、其れなりに。大丈夫ですよ。」

そう言って先生に答えた。しかし流石に顔は見れなかった。先生は、

「そうか、しかし、多少気に為ったんでな。もし困った事があるなら俺に言って来い。」

そう言ってくれた。あたしは「はい……。」とだけ答えておいた。そして其の俣先生は教室を出て行く。

「はああああ……。」

出て行った後、あたしは大きく溜息を吐く。まさかあたしに声を掛けてくるなんて思わなかったから、心臓がどきどきだよ……。そんな時後ろからあたしの肩を叩く者が居た。

「いよ！結城、如何したんだ？」

「きやああああ！」

吃驚してあたしはついそう叫んでしまった。肩を叩いた男子生徒はそんなあたしを見てそれ以上に吃驚する。あたしは落ち着きを取り戻しながら其の男子生徒に言う。

「あ、ああ……。小林。御免、考え事してたから。驚いちゃった。」

小林のほうに身体を振り向きながらあたしはそう言った。小林はあたしの後ろの席に腰掛けながら言う。

「ん……。金山先生か？」

「な?!」

ストレートな質問にあたしはすぐさま反応してしまった。其れを見つつ小林が続けて言う。

「ほっほう……結城の好みはおじ様か……。メモメモっと。」

「な、ちょ、ちょっと……。」

あたしは顔を真っ赤にしながら小林を捕まえる。抗議をしながら小林が答えてこう言った。

「おいおい、お前が暴露しただけじゃないか。俺は誰かに言ったりはしないぞ。って言うか、お前、此の事先生には言うつもりなのか？」

そう聞かれてあたしは言葉に詰まった。金山先生の事は本当に好きだけど、だからと言って此れから如何しようかなんて考えても無かった…。

「其の…。そう言う先の事なんて考えてなかった…。」

あたしは正直にそう言った。小林はやや呆れて言う。

「おいおい…。お前の気持ちも分からない訳じゃないが、はっきりした方が良いつて事もあるんだぞ？」

「え？どう言う事？」

小林の質問にあたしは逆に尋ねる。小林は答えてあたしにこう言った。

「このまま引きずって卒業まで放置したら、お前、他の男子に失礼だろう？」

「え??？」

言っている意味が分からずにあたしはそう答える。小林は呆れたように言う。

「お前…自分がもててるって自覚ぐらい持てよな。結構騒がれてる

「んだぜ男子の間では。」

「は?!」

小林の言う内容が理解できずに素っ頓狂にあたしは答えていた。小林はやれやれと両手を広げる動作をしつつ、こう言う。

「人は容姿だけでは見ないんだ。容姿なんて時と共に変わっていくしな。第一お前だってそうだろうが。金山先生は立派な人だが容姿はいいつて方じゃないぞ。」

そう言われてあたしは少し考えた。こいつはあたしの事を考えて言ってくれている。其れは分かるんだけど…。

分かるんだけど…

やっぱり…

「でも…あたし言えるほど勇気が出ないよ…。」

そんなあたしを見て小林はやれやれと再び両手を広げていた。

はあ…

今日は特に体調が悪い…

朝ごはんもつと食べて来るんだっとな…

調子が悪いとつい抜いてくる、そして其れが逆に調子の悪さに拍車を掛ける。理屈は分かるのだが実際に当てはめるのが中々出来ない。

「まるで、あたしの恋わずらいと同じよね。」

ふとあたしは声に出してそう言っていた。そんな時、

「おや、結城、お前恋でもしてるのか？」

え……？？

な、な、なああああ！！

金山先生、どうしてこんなところに……って此処は学校だからそりゃ居てもおかしくは無いけど……

先生は、あたしの答えを待ちつつこちらを見ている。恥ずかしいけど、此処は正直に言うしかないのかな……

「あ、あの……。」

言わなければいけないのは分かるのだが、其処で結局あたしは言えなくなってしまう。金山先生は暫く待つてくれた。あたしは少し深呼吸をしてから答えて言った。

「はい、あたし恋をしています。」

それに頷きつつ金山先生が言う。

「うんうん、若いのはイイコトだな。相手にはもう言ったのか？」

ドストレートな質問が来た。あたしはあわてつつも答えてこう言った。

「あ、いや、其の……その人、少し歳が離れた人でちよっと思いを伝えるのが難しいかな……なんて……。」

其の答えをつんつんと暫く金山先生は聞いていたが、しばし悩んだ後にこう言った。

「しかし、伝えないと進展しないんじゃないか？」

「あ、いや、其れは正論なんですけど…勇氣と言っか…機会と言っか…中々掴めなくて…。」

実は目の前に居る人です！なんて言える訳の無いあたしはそう言っ
て誤魔化してしまった。金山先生は真面目に悩みながら少し考えて
からこう言った。

「確かに其れは難しいな。だがな、結城。やらないで後悔するより
は、全てやりつくして後悔した方がいと思うぞ。偉い学者もそん
なこと言ってたしなあ…。」

はあ…其れはそうかもしれないけれど…。目の前にその人が居て、
その人にそんな事を言われるなんて…。あたしって、運がいいの？
悪いの？

思い悩んであたしは暫く黙り込んでしまっていた。金山先生は其の
間もあたしを見守ってくれている。勿論教師としてなんだろうけれ
ど。

もし、あたしだけのものに出たら…。どんなにか良いだろう…。
独善的な独占欲だとは思いつつも、あたしはそう考えていた。
そして…

「あの…金山先生…聞いてもらえますか？」

一握りの勇氣と共にあたしは思いを伝える決心をしていた。

帰り道。

何時もの様に小林があたしの肩を叩いてきた。

「どうした、元気が無いようだけど。」

そうあたしに言ってくる。あたしはボソツと言う。

「振られちゃった…。」

其の答えに小林は暫く何も言わなかった。少ししてから、多分何を言おうか考えたんだろう、こう言った。

「そうか。金山先生も見er目が無かったって事だな。俺が見てもお前は良い女なのにな。」

「え?…。」

言われた事が理解出来ずにあたしはついそう言っていた。小林は顔を赤くしつつ言う。

「おまえなあ…人が折角告白してるんだから、少しは普通に聞いてくれよ…。」

あ、いや、だって…そんな事考えてなかったし…。あたしは混乱しつつも答えて言った。

「えっと、あたしでいいの?」

そんな馬鹿な質問をしたあたしに小林は呆れて両手を広げつつこう言う。

「相変わらずだな、結城。俺は、お前がいいんだ。分かるか？」

そう言われてあたしは頷いた。そうして小林はあたしを抱いてきた。なんだか其れがすごく嬉しかった。そして喜びながら小林が言う。

「勇気を出して言って良かった。やっぱり、言わないで後悔するよりは言って後悔した方がいいな。」

其の答えにあたしは小林の胸の中で小さく「うん、そうだね。」と答えた。

金山先生、貴方の言う通りでした。確かに、どうせ後悔するなら全てやった方がいいですね。

有難う先生…

第一章 Lehrer(レラー)(先生)(後書き)

ご愛読頂き有難う御座いました。

今回は短い作品ですが楽しんで頂ければ幸いです。

不定期ですがこれからも少しずつ書いて行きたいと思えます。
今後とも宜しく御願いたしますね。

第二章 Schwester (シュヴェスター) 「姉妹」 (前書き)

今回もショートストーリー…汗

もう少し練れないと駄目だなあ…。
とりあえずお楽しみください。

m () m

第二章 Schwester (シュヴェスター) 「姉妹」

小説 Liebesgeschichte (リーベス・ゲシヒテ) 恋物語

シュヴェスター

第二章 Schwester 「姉妹」

「お姉ちゃん！」

あたしは、そう叫んでいた。でも、其の声はお姉ちゃんには届いていなかった。お姉ちゃんは、見知らぬ男の人と一緒に何処かに行こうとしている。

「待つて！お姉ちゃん、あたしを見捨てないで！」

そう訴えるが、まるで何かに遮られているかの様に、声は向こうに伝わらない。完全にお姉ちゃんを見失い、あたしは絶望と共に座り込んでしまう。

そして、涙が溢れる。其れは頬を静かに流れ始め、口元を通り、顎の下から、座り込んでいる足の上に落ちていく。

其の俛、あたしは気を失い……。

「はっ！……。な、何だ、夢か……。」

布団から起きて、あたしはそう言った。そう、あたしは夢を見ていたのだ。大好きな菖蒲^{あやめ}お姉ちゃんが居なくなる夢を。あたしは布団から出て、窓に掛かっていたカーテンを開ける。朝日が肌に射す。其の実感により漸くあたしは現実を認識できるのだった。

「はあ、嫌な夢だったわ。何であんな夢なんか……。」

そう言っつて、夢の内容を思い起こそうとしていた。然し……。

「あれ？確か……。」

思い起こそうとしたのだが、お姉ちゃんを失いたくない。と言う事以外、殆ど覚えていなかった。しかし、「嫌な」夢である事は覚えていた。

「ま、嫌な夢だし無理に覚えて無くてもいいか。」

難しく考える事に飽きたあたしは、そう結論付けて、朝の身支度を始めた。

通学途中。あたしは足を速めて、目的地に向かう。そう、其処には……。

「あ、いたいた。お姉ちゃん！」

あたしはそう言う。そう言われた女性は苦笑しつつもあたしに手を振る。そうして、あたしは、その人の胸に飛び込む。

「あらあら、相変わらずねえ、蓮華^{れんげ}は。」

その人はあたしをそう呼んでくれた。そう、彼女こそ、あたしの

大事な菖蒲お姉ちゃん。あたしの自慢のお姉ちゃんなのだ。あ、でも、血は繋がっていないよ。歳も同じ年だし。でも、あたしにとっ
てはお姉ちゃんなんだ。そしてあたしは、お姉ちゃんと一緒に学校
に登校した。

二人で教室に入る。中にはクラスの皆が居た。

「お早う！」

「お早う御座います。」

あたしとお姉ちゃんはそう挨拶をする。それに答えて、既に来て
いる何人かのクラスメイトが挨拶を返してくれた。普段通りの毎日
の反応だ。そしてあたし達は指定されている座席に着いた。あたし
の隣にお姉ちゃん。

「うふふふ。」

つい今日も嬉しくて、声に出して喜んでしまう。其れを見て、

「相変わらずだな蓮華は。」

そう言う奴が居た。あたしの席の前に居る奴で、佐藤学という男
の子だ。何故かあたしに良くちよっかいをしてくる。

「えへへ。だって嬉しいんだもん。」

あたしはそう答える。それに答えて、学の奴は、

「やれやれ、ゾツコンなのはいいが、取られない様に頑張れよ？」

何故か、そう言ってきた。あたしは疑問に思い、

「如何言う事、其れって？」

そう聞いた。学は其れに答えて、

「何だ、知らないのか？ 菖蒲の奴、誰かと付き合ってるって噂だぞ？」

そう言った。あたしは其の言葉に耳を疑った。ふと、今朝見た夢を思い出す。何か、あつた様な…。然しはつきりとは思いきこせない。其のうち、あたしの目から、何かこぼれているのが分かった。

「お、おい……。」

学がそう言う。然しあたしはそんな事など無視をして呆然としていた。隣に居た、菖蒲お姉ちゃんがあたしに気付いて、

「あら？ 蓮華如何したの？ ちょっと御出でなさい。」

そう言っであたしを立たせて、引っ張っていく。あたしは為すまま、其れに付いて行った。

あたしは菖蒲お姉ちゃんに連れられて、人気の無い、実習棟の廊下の隅に来ていた。そこは丁度影に為っており、人目にも付かない。また、屋内で無かったので声も殆ど響いたりはしなかった。

其処で、菖蒲お姉ちゃんがあたしの顔を拭いてくれる。そして、

「如何したの蓮華？私に話して御覧なさい。」

そう親切に言ってくれた。あたしは、

「お姉ちゃんが、誰か他の人に取られるかもって……思っちゃって
哀しくなってたの。」

素直にそう、自分の気持ちを吐露した。お姉ちゃんは苦笑して、

「ん〜……。ああ…、従兄弟の三郎お兄さんと一緒に居たからね。
誰か其れを見たのかも知れないわね。」

そう言っていた。あたしは、

「誰なの？其の人。」

そう聞いていた。お姉ちゃんは、微笑みながら、

「私より三つ程年上で、大学で頑張っているお兄さんよ。伯母さん
の調子が悪かったので、私の家に来て話してくれてたの。其の帰りに
送っている時に誰かが見たんでしょうね。」

そう言ってくれた。あたしは、

「じゃ、じゃあ。誰か付き合ってるとか、そんな事は無いよね？！
あたしただだよな？！」

焦って性急にそう聞いていた。お姉ちゃんは微笑んで、

「お馬鹿さん。私は、貴女しか見ていないわよ。可愛い蓮華。貴女は私のものよ？」

そう言いながら、あたしの顔に優しく手を掛けてくる。あたしは其の手に寄りかかるようにして、

「うん…あたしはおねえちゃんのもんです……。」

そう言った。お姉ちゃんは更にあたしを抱き寄せて、優しくキスをしてくれる。其れも、唇に優しく。

「ん……………」

あたしはじっくりと其れを味わっていた。暫く其の状態が続く。そうして、漸く離れる。其の後でお姉ちゃんはあたしに、

「さて、もっとしてあげたいけれど授業が始まるわね。そうね、今週の週末、二人でどこか行きましょうか。」

そう言ってくれた。あたしは元気に、

「うん！楽しみにしておくね！」

そう答えて、教室に向かって歩き出した。

大好きなお姉ちゃん。あたしは絶対に手放さないから。そう、絶対に。そして今度こそ……………。

そう、あたしは決意して、教室へ向かう足を速めていた。

第二章 Schwester (シュヴェスター) 「姉妹」 (後書き)

綺麗な描写が難しくなっていく…。

煩惱まっしぐらだからかも…汗

次回も頑張ります……。

ではー ー ー

第三章 Liebst(リップスト)「最愛の」(前書き)

全て描くと長編小説になるので、かなり端折はしよっています。
上手く描けていれば良いのですが。

お楽しみください。

第三章 Liebst (リーブスト) 「最愛の」

小説 Liebesgeschichte (リーブス・ゲシヒテ) 恋物語

第三章 Liebst 「最愛の」

もう二十年も前の話だった。あたしは其の時は高校生。幼い頃から、普通の人より免疫が低かった為に、病院に通ったり、入院する事が多かった。小さい時と比べて減ったとは言え、其の時も、体調を崩して病院に来ている処だった。

「あゝ……。生きるのが面倒臭いわ。」

廊下で立ち止まり、ふとそんな事をあたしは言っていた。そんな折、廊下に繋がった病室から、くすくすと笑う笑い声が聞こえて来た。あたしは、自分の声が聞かれてしまった、と思い、其の病室を覗く。其処は個室で、偶々たまたまのか入り口が開いていた。まあ、でなければ声など聞こえないであろうが。あたしが其処に入ると、一人の男性の患者がベットで横に為っていた。

あたしに気付いて男性が、

「ああ、笑い声が聞こえてしまいましたか。申し訳無い。僕にとつて「楽しい」御意見が出たもので、思わず笑っていたんですよ。」

微笑みつつ、あたしにそう言った。あたしは顔をやや赤くしながら、

「あ、あの……。不躰ですけれど、あたしのさっき言った台詞が、

あなたにとって「楽しい」と言うのは如何言う事ですか？」

そう聞いた。男性は、笑みを湛えた俣こつ答え始める。

「そうですね……。大変な事を、気楽に考えれる其の考え方が「素敵」だと僕が思ったので「楽しい」と言ったのです。」

あたしは、其の意味が良く分からず、

「あの……。仰っている意味が良く、あたしには分からないのですが……。」

苦笑しながらそう言った。男性は、

「そうですね……。生きる」と言う事は大変なので、「面倒だ」と言われたんですね？」

そう聞いてきた。あたしは、其れに、

「え、ええ。あたし自身、色々抱えている物がありますから、其れで愚痴っぽくなってそんな事を……。」

最後は小声に為り、言い切れなかったが、そう言った。男性は、其れを頷きながら聞いてから、

「其の考え方が、僕にとっては「素敵」だったんですよ。」

確信を込めてそう言った。あたしは、如何答えていいか分からず、呆然としていた。男性はあたしを見ながら、

「ああ、そう言えば、お話しているのに、自己紹介もまだでしたね。僕の名前は武と言います。武士の武、から「たけし」です。」

そう、自己紹介を始めた。あたしは其れに釣られて、

「あ、あたしは、かをとと言います。「を」の字が、わをんの方の「を」を使います。なので平仮名です。」

そう、自己紹介をした。武さんは其れを聞いて、

「へえ、余り聞かない呼び方ですね。うん、此れも「素敵」だな。」

そう言って頷く。あたしは何故か、恥ずかしくなり顔を赤くして俯いてしまっていた。武さんは、微笑みながら、

「まあ、立ち話もなんですから、其処の椅子にでも腰掛けて下さい。」

そう言って、ベットの傍にある椅子を勧めてくれた。徐にあたしはそこに座る。そして、

「さて、分かりにくいようなので、僕の身の上から話させて頂きましよう。」

そう言って、武さんは話を始めた。

彼は、まだ33歳、若く此れから働き盛りと言う年齢だ。にも拘らず此の様に入院しているのは、悪性の「癌」に蝕まれていたからであった。癌と言うものは、歳若いと、活発で進行が早く、気づくのが遅れると、治療も出来ないほど転移して、文字通りどうしようもない状態と為る。彼は、あたしにそう説明してくれた。今、彼は、

進行を遅らせる為の抗癌剤を飲みながら、余生を過ごしているのだ、
と言うのだ。

あたしは其の事に何も言えなくなった。自分は、大変とは言え、
まだ生き続けている。そして、又、特別な事が起きない限り、「生
きる」事が出来る。然し、彼は、「最期」が定められてしまい、し
かも、少し遅らせたとしても、其の最期は、筆舌を絶する苦しみの
元に訪れるのだ。あたしは、頬に水が流れている事に気がついた。
熱い、情熱の水が。

「ああ、済みません。僕は何時もストレートに言うから、如何して
も、他所様を感傷的に為らせてしまいますね。」

武さんがそう謝る。あたしは首を振って、

「ううん。ストレートに言ってくれて嬉しい。いえ、多分あたしは、
あなたが好きです。そう言って、構ってくれる事も、あなた自身の
気質も、だって、一緒に居て「気持ち良い」ですもの。」

感情を込めてそう言っていた。武さんは、苦笑しながら、

「はは……、死していくこんな存在に惚れたら、あなたの悲しみが
増えるだけですよ?」

そう言った。あたしは、更に首を振って、

「そうかも知れませんが!其れでも、あたしの「心」に「何か」を
与えてくれたのは、武さんの其の「言葉」です。其処に、あたしは
「幸せ」を見出しました。あの……。初めて会ったばかりなのに、
こんなのは不躰ですけれど。」

其処まで言って、一旦話を止めて、武さんの反応を見る。武さんはあたしを見て、

「どうぞ。続きを言ってお下さい。」

優しくそう言ってくれた。あたしは続けて、

「此れからも、此処に来て、お話をしているでしょうか？」

言いたかった事を、そうやって吐露した。武さんは微笑んで、

「やれやれ、物好きな人を巻き込んでしまったようですね。分かりました。僕の方は一向に構いませんよ。寧ろ、話し相手に為って下さるのであれば、此方が感謝したい程ですよ。是非御願います。」

そう言ってくれた。あたしは笑顔で武さんの手を掴み、

「有難う御座います！明日も、参りますね！」

そう言いながら立ち上がった。そんな時、武さんの家族の方が、病室に戻ってきた。

「あら？お客さん？」

其処で、武さんから、あたしについて紹介されたのだった。

其れから約三ヶ月、あたしは毎日のように病院へ通った。武さんと、毎日のように話し合うのは楽しかった。何気ない日常の会話、自分の趣味、嗜好、思想、話し始めると、中々止められず、何時も家族の人に、面会時間が終わりますよ。と言われて、さすがに帰る毎日が続いていた。武さんも、あたしに構ってくれて、色々な事を話してくれたのだった。あたしは其れをウツトリと聞くのが楽しみになっていた。

「まあ、そんな感じで……ごほっ！」

武さんが会話の途中で咳き込む。あたしは、直ぐ走り寄って背中を優しく摩こすろうとした。摩りはしたものの……。あたしは其の場に硬直してしまう。

「済みません……。隠していたかったけれど、ばれてしまいましたね。」

武さんが済まなそうに、あたしにそう言った。彼の身体は……。もう、ガリガリに痩せていた。そう、ミイラのように。骨が立っていて、下手にいろいろと痛々しかった。そう、骨に立ちそうで……。

「武さん、もしかして、もうかなり苦しいのでは……。」

あたしは、何とか其処まで言えた。武さんは苦笑しながら、

「済みませんね、あなたを哀しませたくないのです、誤魔化して来たのですが、逆に、裏目に出たようですね……ごほっ。」

最後には咳き込みながらそう言った。あたしは、

「もう喋らないで！看護婦さんに伝えてきます！」

そう言っつて、あたしはナースセンターに走っていった。そんな姿を見て、武さんは、如何思ったのだろう。

ベットに寝た武さんは、鎮痛剤とその他の処置を受けた。然し……。

「もう、症状がかなり悪化しています。モルヒネなどで、幾らかは痛みが緩和出来ますが、此れも最終的には気休めです。」

担当医は、悔しそうに、あたしも同席している家族の前でそう説明していた。彼は、もう、痛みですら緩和されない、地獄の中を歩まないといけないと言うのだ。医学が進んでいる、と言われているが、苦しむ人々はまだ多く、そして助けられていない。そう、担当医は悔しそうに言った。あたしは、彼の、そして家族の、更に、手助けしたいのに、自分の非力さに嘆くお医者さんの、苦悩を思っているの間にか泣いていた。

「かえるは泣き虫ですね……。」

ふと、武さんがあたしを見てそう言っていた。あたしは、

「武さん！無理はしないで……。」

そう言っつたが、武さんは、首を振りながら、

「いいえ、時間がもうありませんから、此処は「無理」をするのです。でないと、あなたを置いて行って、僕が後悔してしまいますからね。」

そう言った。あたしは言っている意味が分からず、

「其れって……如何言う事？あたしにはまだ分かんないよ。」

そう言っていた。武さんは答えて、

「今は分からないでしょう。只、これだけは約束をして下さい。例えば僕が亡くなったとしても、かをる、あなたは、僕の歳よりも長く行き続けて下さい。そうすれば、恐らく、僕が言いたかった事が少しは分かるでしょう。僕が、かをるを愛していた事が、「最愛の」者だった事が分かる時が、ね。」

そう言って咳き込む。其れが漸く止むと更に、

「これだけは……。絶対に僕の後は追わない様に。其れこそが、僕の望み。「幸せ」なかをるを見続けたいのです。約束……して、くれます……ね？」

そう言った。あたしは、

「わかった！分かりました！約束します！だから、だから！………
…。」

最後は泣きながらそう言っていた。武さんは、

「は、はは……相変わらず泣き虫だ……そろそろ、僕は休みましょう。明日も御出でなさい。又……話しましょう……。」

そう言った。あたしは、武さんが寝入った事を確認してから、病室を後にした。

翌日、病室に入ったが、武さんは、非常な苦しみで会話など出来る状態ではなかった。其れでも、自分が苦しんでいるのに、あたしには一生懸命に笑顔でいてくれようとしていた。あたしは其れが辛かった。でも、彼の精一杯の愛情。其れを全て返せる訳ではないが、あたしは、彼を世話を手伝う事で、少しでも果たそうとしていた……。

更に三日経った、ある日。

「御臨終です。」

担当医がそう言った。そう、彼は最期まで走りぬいたのだ。最期の最後まで、自分よりもあたしを気遣いながら。あたしは其れを聞いて、人気の無い所に走っていった。そして、

「馬鹿！馬鹿！……あなたはあたしばかり……馬鹿……。」

あたしはそう言っていた。ふと、彼の声が聞こえる気がした。

「そうですね。でも、「最愛の」あなたに出会えて僕は幸せなんですよ。」

振り向いたが、其処には誰も居なかった。そしてあたしは、

「うわあああああああ！……！」

大声で、涙を流して泣いた。

大好きな、「最愛の」あなた。武さん。あなたの言葉を守ります。あたしはそう決意した。

あれから約二十年。あたしは三十八に為った。

「もう、こんなに経ったのね。」

彼の墓の前に来てそう言っていた。そして、

「まだ頑張ってるわ。あたしは。今五年延長中。此れからも頑張ります。」

そう言う。そう、彼との「約束」を守る為。「最愛の」人の約束を。頑張って生き続けるわ。其れが、あなたの望む事。そして、其れこそ、あたしが望む事！

だよ、武さん。

第三章 Liebst(リープスト)「最愛の」(後書き)

読んで頂き有難う御座いました。

余り詳細は述べていませんが、機会があれば少し語りたと思います。

では、次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3607i/>

Liebesgeschichte (リーベス・ゲシヒテ) ~ 恋物語 ~

2010年10月9日06時34分発行